

平成23年度 兵庫県立こばと聴覚特別支援学校 学校評価

1 学校評価の目的

- ① 学校教育活動全般について、客観的、総合的にその成果を検証し、学校運営の改善を図る。
- ② 教職員が教育活動やその他の学校運営の成果や課題を共有し、協力して教育活動を行うことにより、組織の活性化を図り、また自己の教育活動の点検をととして自己の専門性の向上を図る。
- ③ 学校評価結果の公表により、学校の説明責任を果たし、保護者や地域の人々から教育活動その他の学校運営に対する理解と参画を得て、地域に開かれた信頼される学校づくりを進める。

2 学校経営の重点

- ① 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。
- ② 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら個性と能力の伸長を目指すとともに、一人一人のニーズに応じた教育を行う。
- ③ 愛情に満ちた親子関係の中で望ましい育児が行えるよう、保護者の支援を行う。
- ④ 聴覚学習を通して個に応じた聴覚の活用を促すとともに、視覚情報を効果的に取り入れてコミュニケーション活動を活発にし、基礎的な言語の獲得を進める。
- ⑤ 豊かな生活体験を通して基本的な生活習慣の確立をはかり、障害に基づく困難の改善と克服および自立を目指す人間性の素地を培う。
- ⑥ 地域におけるセンター的機能と聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。

3 自己評価基準 A 達成している B おおむね達成している C あまり達成していない D 達成していない

学部・分掌	H23各部重点目標	これまでの具体的取り組み	自己評価	結果および課題・改善方策	評価結果と改善方策についての評価
保育相談部	一人一人に応じた育児支援を行い、幼児の調和のとれた発達を促す。	個々の幼児の発達に合わせて、保育内容を検討し保育を行った。保護者に対しては、個別保育の中での話し合い、母子日誌でのやりとり、また月1回程度の学年懇談会、保護者研修を通して育児支援を行ってきた。担任相互の連携や学年の枠を越えての意見交換も密に行うようにしてきた。	B	今年度は幼児の発達差が非常に大きく、個々の幼児の実態を的確に把握し、課題を見極め、必要な支援を行うことが求められてきた。外部講師を招いて助言をいただいたり、各自1回の研究授業を行うなどして、幼児の実態に応じた保育を目指してきたが、力不足の面もあったと反省している。今後も研修、研究を深めるとともに、実際の保育場面を見合い、意見し合う中で、さらに教師の力量を高めていきたい。	保護者のニーズが多様化し、職員の考え方を変えていかなければならない。個々のニーズへの対応は難しい。保護者アンケートでの厳しい意見は、裏返せば、保護者の力が付いてきたことの証であり、本校教育への期待感の表れである。
	親子の交流が活発に行われるよう、個々の親子の実態に応じた取り組みを行う。	保育の中で、母子での遊びをはじめとした母子活動を行い、その中で関わり方、伝え方のモデルを示すなど具体的な提示を行ってきた。再現遊びのおもちゃ(消火器等)を学年懇談で一緒に作ったり、また絵日記を作ってもらいその活用の仕方を示すなど、家庭でも遊べるよう支援を行った。	B	部全体を通して母子の関係は良好で、母子間の共感など気持ちの交流は図られたと思うが、個々の幼児の実態に合わせたコミュニケーション手段の活用をすすめ、保護者への定着を図るという点では課題が残った。今後より丁寧で具体的な支援を行い、親子の交流が活発に行われるよう、コミュニケーション手段の提示、活用、定着を図っていきたい。	教員間の共通理解のもと、しつけの部分では厳しさが必要である。
	様々な活動を通して幼児の主体的な聴覚活用を促す。	聴能担当と連携をとりながら、聴力測定や補聴器の調整を行った。幼児の聴力、音反応を把握した上で、音遊びや歌・ダンスに取り組んだ。保育で行う歌やダンスは毎月ビデオに撮り、各家庭に配布し、家庭でも親子で楽しめるようにした。	B	主として普段関わっている担任が聴力測定を行うようにしてきたが、人数の多いクラスでは、聴力測定の間隔があいてしまうなど問題点もあった。聴力測定実施の表を作成し、間隔をあげずに定期的に行っているかのチェックをしていきたい。今後も発達に合わせて聴覚活用をすすめていきたい。特に聴力の厳しい幼児に対しては、きめ細かなステップで聴覚活用を図りたい。	本校でしっかりと話を聞けたという実感が大切であり、小学校等では、多人数の中そのような実感はできない。こばとでしかできない教育を大切にしてほしい。
幼稚部	豊かな心とことばを育てるため保育内容の充実を図る。	研究活動では「話し合い活動」に焦点を当て、コミュニケーションの力を育てる教師の働きかけを研究した。また「子どもの発達に応じた教育課程の検討」を行った。年間各職員1回の研究授業を行い、指導力の向上を図った。	B	週1回の勉強の場である研究活動では、教育課程の見直しと話し合い活動の検討を行った。年間各職員1回の研究授業は予定通り行えた。幼稚部教員全員で事前に指導案を検討し、また事後に授業分析しながら授業研究会をすることで指導力の向上につながっていると考える。実際に分析を行えたのは、年度後半になってからであったので、来年度は年間通して分析をしていきたい。	教育課程の中で、遊びに関する部分を工夫して取り入れていく必要がある。
	保護者のニーズを把握し、支援の充実を図る。	個別懇談などを通して、保護者の思いを受けとめ、親子のコミュニケーションの充実を図るため、保護者研修や保育参観後の懇談を行った。	B	個別指導の時や時間を見つけて一人ひとりの保護者と話し合う時間を取ったが、すべてのニーズに対応したとは言えない。保護者研修は予定通り行い内容も保護者の期待に添うものであったが、来年は絵日記や日常的な親子のかかわりなど、すぐに実践に結びつくものを取り入れたい。	学校では集団保育が大切である。個別保育の部分は家庭に任せることも可能で、そのバランスが大切である。
相談センター部	聴覚障害のある乳幼児、児童生徒への教育相談の充実を図る。	新生児から高校3年生までのお子さんを対象に教育相談を実施した。随時、医療・福祉・教育機関等と連携しながら、個別に対応した。	B	今年度は、教育相談の担当者が減ったので、相談の間隔が少し空いてしまうこともあった。相談件数も減ってしまったので、学校の体制も含めて検討していく必要がある。軽度難聴のお子さん対象の集団教室を1度開催してみたが、好評だったので、今後、個別相談以外にも集団教室を充実させることを検討していきたい。	聞こえや言葉などの障害に関すること以外にも相談に乗ってもらえるとありがたい。相談機能をより充実させてほしい。
	聴覚障害児教育に関して理解・啓発を図る。	幼稚園や小学校からの依頼で、研修の講師を担当した。また、保健師との懇談会を本校で開催し、聴覚障害児の発見や聴力検査等についての専門的な研修を実施した。	B	難聴の発見が遅いケースがあるので、聞こえのことは本校に相談すれば良いということをもっと幼稚園や小学校等にアピールする必要がある。教育委員会との連携を深めて、早期発見できるようにしたい。依頼があった研修会等の講師依頼全てに応えることはできなかったが、できる範囲で対応した。	中軽度難聴児に対する支援についてもこばとの相談を勧めていきたい。
	校内支援体制を充実させる。	各学年の保育、聴力測定、発達検査等の補助や保護者研修時の保育支援を行った。	B	各担任と打合せをして、教育相談の予定と重ならないように保育の支援等を行った。	卒業生が継続して本校に相談しに來れるような支援体制を整えてほしい。

学部・分掌	H23各部重点目標	これまでの具体的取り組み	自己評価	結果および課題・改善方策	評価結果と改善方策についての評価
教務部	昨年度より、3年計画で子どもの実態に応じた教育課程を編成していく。	研究部と連携し、昨年度より継続して各学部で現教育課程の見直しを行っているところである。	B	保育相談部では、子どもの実態と照らし合わせ見直しを行い、新たに『聞こえ』や『ことば』などの項目を設けるなど、より実践で活用できるものを作成していく。	
	全幼児に対して改定した個別の教育支援計画を策定する。幼稚部については、改定した個別の指導計画を作成し活用する。	全保護者に対し個別の教育支援計画について説明し、同意の上策定した。今年度より入学した子どもに対しては、これまでに受けた支援をシートにまとめ担任に引き継いだ。幼稚部については、改定した様式に基づき指導計画を作成し指導を行った。	B	個別の教育支援計画について、保護者の理解が少し進んだと思われる。今後は、個人交流や進学の際の活用方法、情報の引き継ぎと管理などを検討していく必要がある。個別の指導計画については、現在のところ課題は出ていないが、今後も個々の実態に即した計画と指導内容の作成を行っていく。	
研究部	保育相談部、幼稚部それぞれの教育ニーズに応じてテーマを設定し、週1回程度研究活動を行う。年に1度、全担任が研究授業を行い、本校の授業の在り方について考え、一人ひとりの指導力の向上を目指す。本校の課題に応じた研修会を企画、実施する。	年度当初に、各部ごとに研究テーマを設定した。各テーマに基づいて、週1回程度の研究活動を行うことができた。全担任1回ずつ研究授業ができた。また、外部講師を招へいして授業研究会を行うこともできた。研修会は昨年度同様行うことができた。幼児教育についての研修を設定することが昨年度の課題となっていたので、5歳児学級が学年交流している保育園の園長を招き、幼児教育についての研修会を行った。	B	各部とも、本年度の研究授業の記録、分析及び授業研究会についてのまとめを行っている。また、教育課程についても整理を進めている。研究授業、授業研究会を通して、子どもの実態をとらえて保育を続けてきたが、客観的な助言が今後も必要である。外部講師を招へいしての授業研究会は来年度も引き続き行い、職員各自の授業実践力を上げていけるようにしていきたい。来年度以降も幼児教育についての研修は行いたい。特に具体的な保育実践について学ぶ機会を設けて、本校の保育に生かしていきたい。	研修、研究授業等の取り組みが多い中、先生方の苦勞が理解できる。専門性を高める努力をされている。
	保護者のニーズに合った保護者研修会を企画し実施する。	「福祉制度」「食育」「成人聴覚障害者の話」など保護者のニーズに合わせて、月に1回程度の保護者研修会を企画し、実施できた。	B	本校は幼稚部単置校であるため、幼稚部卒業後の子供の姿が保護者にはわかりにくい。そのため、本校の卒業生やその保護者及び進路先の実践などについての研修は、来年度以降も続けたい。また、年度末の保護者アンケートの中で「希望する研修項目」の項を設けて、保護者のニーズをつかみたい。	多くの成人難聴者の方の話を聞きたい。多くの人の生き方を見ることで子どもも自分の生き方を考えることができる。
生活部	幼児の主体的な活動が営まれるよう配慮しながら、行事を計画・立案し、適切な環境を設定する。	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの発達、興味・関心に基づき、年間の保育行事を計画し、校内の職員と連携をとりながら行事運営を行った。 子どもたちが季節を感じられるよう花壇などの環境整備を行った。 子どもと小動物が触れ合う機会を作るための働きかけ(えさ、スタンプ)を行った。 グラウンドや中庭の状態を点検し、砂場や遊具等の安全管理に努めた。 	B	保育行事は、職員との連携をとりながら行えた。今後は、PTAとの連携もより密にしながら、行事を行っていききたい。行事は、子どもたちに合わせて、新しい試みを行うことができた。伝統的な行事を大切にしながら、その時の状況に合わせて、内容の精選を行い、円滑に進められるように工夫する。子どもたちが主体的に動植物に触れる機会を工夫していきたい。花壇の花にも興味を持ってもらえるように、季節の花を子どもたちにも植えてもらう機会を作る。	保育行事が工夫され子どもたちが楽しんで参加している。
	楽しい雰囲気の中で食事をとりながら、望ましい食習慣や態度を身につける指導を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが主体になる楽しい活動(あおぞら給食やバイキング給食など)を取り入れた。 子どもたちが食べ物に直接触れ、食べる楽しさを体験する機会をつくった(クッキングや手打ちうどん講習会など)。 日本の伝統的な行事にそった献立(おせちや節分料理など)を取り入れ、そのことについて話題にした。 家庭での食育を推進するために保護者向けに給食だより、親子給食、掲示物を工夫した。 	A	幼児の主体的な活動が多く取り入れることで、様々な食体験を楽しむことができた。今後も、各月の献立が単発なものにならないように、行事や季節に合わせた献立計画を基に、子どもたちにとって給食がより身近なものになるように工夫する。給食室の環境を工夫することで、子どもたちにとって、より給食が身近なものとなった。	楽しい給食活動になっており、熱心に取り組まれている。
	幼児の望ましい心身の発達を促し、健康で安全な生活が営めるよう支援する。	<ul style="list-style-type: none"> 不審者対応訓練や防災訓練や避難訓練、を実施し、命の大切さや安全に対する意識を高めた。特に地震避難訓練は身の守り方を具体的に指導して練習し、映像で地震の怖さを伝えた。 職員による月1回の校内施設・設備の安全点検を行い、危険箇所の修繕依頼や危険防止措置を行い、安全指導につとめた。 保護者・職員の救命講習会を行い、万一の事故に備えた。 朝の安全指導を行い、交通安全の意識を高めた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 避難訓練では幼児・保護者・職員が防災に関する意識が高まった。 防災頭巾を全幼児分購入し、地震や火事に備えた。 不審者対応訓練では警察の指導を受けて、日常の基本的な防犯対策を学んだ。さらに防災意識を高め、命の大切さを伝えたい。 	
情報部	HPで教育内容や学校の特色について発信し、聴覚障害教育への理解・啓発を図る。	各部の紹介、学校行事の紹介等、随時ホームページを更新して、外部に情報を発信した。	B	今年度は、新しく給食紹介のコーナーを作り、毎日更新し、好評だった。学校行事の紹介は昨年度よりも更新頻度が少なくなってしまったので、うまく分担して来年度は回数を増やしたい。	学校の教育活動が良くわかる。
	幼児のコミュニケーション活動が活発になるよう、視覚情報を効果的に取り入れる。	写真や絵カード用の教材を共有ドライブに保存し、いつでも保育に使えるようにした。次年度以降も活用できるように、各学年のフォルダを作り、整理した。	B	職員全員が、共有ドライブの操作に慣れ、データを共有できている。今後さらにデータを増やして、活用していきたい。	
	親子で絵本を読む習慣作りを促す。	毎週水曜日の午後に絵本の読み聞かせを開催した。また、新しい本を購入し、その本の紹介や図書室をよく利用している親子にインタビューし、図書便りに掲載し発行を行なった。	B	今年度は、絵本の読み聞かせに多くの子どもが参加してくれたが、より親しみの持てる絵本の会にしていきたい。図書室で本を借りる子どもが増えているので、来年度も新しい本の紹介や購入をすすめたい。	